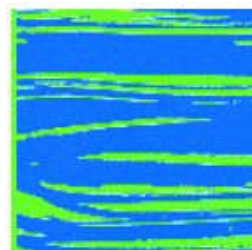


日本行動分析学会ニュースレター

# J-ABAニュース



2012年 夏号 No.67 (2012年9月30日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 園山繁樹  
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内  
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>  
E-mail : [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

日本行動分析学会第30回年次大会を開催して.....	山崎 裕司
J-ABA2012 大会参加体験記:年次大会に参加して.....	林 奈津美
J-ABA2012 大会参加体験記:高知での大会参加報告.....	馬場 ちはる
日本行動分析学会第31回年次大会のご挨拶.....	平澤 紀子
連載:いま、こんな研究しています(16)慢性疾患患者の健康行動に対する応用行動分析 学の適用と課題.....	飛田 伊都子
連載:海外で学ぶ学生、海外で働く専門職(10)日本とアメリカの融合的システム構築を 目指して.....	越智(糸井)まどか
混沌、若さ、ルールと行動随伴性:ヨーロッパ行動分析学会リスボン大会に参加して.....	吉野 俊彦
2013年度「日本在住学生会員のABA/SQAB参加に対する助成事業」応募要項.....	国際委員会
編集後記.....	ニュースレター編集部

---

## 日本行動分析学会第30回年次大会を開催して

山崎 裕司 (高知リハビリテーション学院)

いつもは大都市圏の大学キャンパスを用いて行われる行動分析学会の年次大会。地方の会場を借用して行う第30回年次大会。準備委員長を引き受けてから様々な不安がよぎった。「参加者が少なくて、赤字が出たらどうしよう。」「9月は台風シーズン。なんでこの時期にってしまったのだらう。」などなど。

参加者を集めるにはどうしたらいいか。高知の良い

ところといえば、「カツオのたたき」。「これしかない!」。ちょうど1年前、セミナー生を連れてひろめ市場へ行った。カツオのたたき、肉巻おにぎり、ウツボのたたき、生ビール、乾杯のシーン、写真を撮りまくった。神の助けか、おいしそうな塩たたきの写真が取れた。広報用のパワーポイントを作成して、いざ早稲田大学へ向かう。次期準備委員長の真面目な挨拶を

あきらめ、塩たたき、ひろめ市場、日曜市、高知城と学会の楽しみ方をアピールした。

1号通信を送信して、ポスター発表、事前予約を待った。幸いなことに予約参加者数は順調に伸びていった。これで学会の格好がつかいと安堵した。論文集の作成に忙しく、予約状況をしばらく確認していなかった。振り込み期日を過ぎた8月1日、名簿作成を担当している先生から「予約参加が200名を超えました。」との報告を聞く。昨年の年次大会は、予約参加194名、当日参加246名というデータがあった。高知城ホールの多目的ホールの収容人数は300人。「やばい!」。当日参加が増えると会場に入りきらなくなる。特別講演を別会議室でみられるように手配する。これで400人までは対応できる。安心した途端、事前の懇親会申込みが120名近くになっているとの報告があった。

「やばい!」。大会議室に入りきらない。大会の1週間前に会場を変更する。これで150名まで対応可能だ。しかし、当日の懇親会希望者は考えていたよりずっと多かった。多数の方をお断りすることになった。「すみませんでした」。最終的に第30回年次大会の参加者は、事前申し込み213名、当日受付200名であった。

北澤先生の特別講演「行動分析学の神経生理学的背景」では、予想通り会場があふれた。8年前の年次大会で先生の講演を聞いて感動した私は、もし学会を企画するとしたら先生にお願いすると決めていた。行動分析学の効果が神経生理学的に支持されているという事実は、何度聞いても心強い。杉山先生の教育セミナー「行動分析学入門」には、予想を超える参加者があった。150席用意した座席は足りず、急きょ座席を

追加した。後方座席の参加者の皆様には、スクリーンが遠く、ご不便をおかけしたと思う。この場を借りて謝りたい。それにしても鍛え抜かれたハトの動きには驚かされた。山本先生の公開講座「できるを伸ばす特別支援教育」では、特別支援教育に携わる高知県下の教員の皆様が多数参加された。大会最後の講演にもかかわらず、会場はたくさんの参加者で埋め尽くされていた。

ポスター発表は96題を数え、4分の1がリハビリテーション関係者のものであった。認知症など高次脳機能障害を有する対象者に対する介入が多数報告されていた。大会企画シンポジウムでも述べられたが、認知症患者に対する行動分析的介入の効果の大きさに驚かされた。これから先、この分野が重要な位置を占める予感がする。

大会の運営は、高知リハビリテーション学院の先生を中心として、在学生、卒業生によって行われた。ほとんどは行動分析学会に関係のない方々である。学会が滞りなく運営できたのは、これら運営委員一人一人の心配りの賜物である。心から感謝したい。

数多くの先生から、カツオのたたきがおいしかったとお褒めの言葉を頂いた。誇大広告にならなくてよかった。高知の食材は、多種多彩である。お土産で一番喜ばれるのが水晶文旦。また、小夏、フルーツトマト製品、ゆず製品も人気である。鮎は品評会で何度も日本一を獲得している。次回、高知に来られるときは、違った食材も試していただきたい。

最後に、ご参加いただいた皆様に心から感謝し、また高知においていただけることを願っています。

---

## < J-ABA2012 大会参加体験記 >

### 年次大会に参加して

林 奈津美 (福岡教育大学教育学研究科)

今年の行動分析学会は、9月1日、2日に高知城ホールにて開催されました。私は、学会への参

加は今回が初めてでした。私がこれまでに抱いていた『学会』のイメージは、“厳粛で堅苦しい”

というものでしたが、実際に学会に参加してみるとアカデミックな場であることはもちろん、多くの先生方や学生の交流の場でもあり、2日間という短い間でしたがとても刺激的で有益な経験をすることが出来ました。それでは拙い文章ではありますが、私にとって全くの『未知なる世界』であった今大会での体験を紹介させていただきます。

大会初日、私は期待と不安が入り交じる中、開催場所である高知城ホールへと向かいました。受付を済ませ会場内に入ると、すでに多くのポスターが掲示されており、基礎から臨床まで幅広い研究テーマのポスターがぎっしりと掲示板を埋めていました。私は、会場内の予想以上の人の量とその熱気に圧倒されながら、「私もこの中に混じって発表するのか」と思うと、何とも言えない緊張感が胸がいっぱいになりました。

一方で会場内では、シンポジウムやセミナーなども多く開かれていました。行動分析学の基礎から応用まで、幅広く学べる充実したJ-ABAのプログラムに心躍らせたのを覚えています。

私は、自分の発表時間までしばらく時間があつたため、それまでに発表論文集を拝読して気になっていたポスター発表を拝聴しに行きました。ポスター前に到着すると、すでに多くの方が集まって白熱した議論が行われていました。私は、どうにかその議論についていこうと必死に耳を傾けましたが、「難しくて、頭に入っていない...」というのが正直な感想でした。結局、最後まで発表者に質問することも、議論に参加することも出来ずに終わってしまい、自分の力不足を痛感させられました。それでも、「このままで終わってしまうのは、もったいない！せつかくその道の専門家が来られて発表されているのだから、恥の一つや二つかいてでも自分なりに質問してみよう！」と思い、次に拝聴しに行ったポスター発表では思い切って質問してみました。

発表者は、私の拙い質問に対して一つ一つ丁寧にお答えくださり、研究者としての緻密さや

細かなこだわりを感じると共に、私も自分の発表の際には出来る限りを尽くし、一人でも多くの方に自分が携わってきた研究の面白さを知ってもらおうと思いました。

いよいよ発表本番の時が迫り、自分のポスター前に立っていると、先生方が発表を見に来てくださいました。今回、私は、『遅延価値割引事態における環境明瞭度の増大がELマウスの衝動的行動に与える影響』について、学部時代の指導教官であった麦島先生他との共同発表をしました。初めての発表ということもあり、私の緊張はピークに達していました。麦島先生からサポートを受けながらも、先ほどのポスター発表を拝聴しに行った際に抱いた熱意とは裏腹に、とても拙い説明しか出来ず、悔しさが残りました。それでも皆様が貴重なご意見やご質問をくださったことで、自分の中で新たな気付きが生まれ、そしてまた、多くの先生方の多面的な視点や発想に触れることが出来たことは、今後研究をする上で大きな意味を成すだろうと感じました。

大会2日目の午後からは、杉山先生の『セラピストのための行動分析学入門』という教育セミナーを拝聴しました。このセミナーを通して、学部時代に講義の中で習ってはいたけれど、曖昧になっていた知識を体系的に整理することが出来ました。また、『行動分析学の基礎知識を、どのように臨床の場で活かすか』というお話は、将来、臨床心理士を目指す私にとって、とても興味深いものでした。セミナーは、『入門』ということもあり、初学者の私にとっても大変分かりやすい内容になっており、とても充実した時間を過ごすことが出来ました。

今回が私にとって初めての学会参加でしたが、自分の携わった研究に対する新たな視点の他にも、様々な研究をされている方々とお話しをさせていただく中で、本当に多くのことを学ぶことが出来ました。また、私と同年代の他大学院の学生達との交流は、とても良い刺激になりました。『今どのような研究をしているのか、何

に興味・関心があるのか』、自分の立場を明らかにして先生方にご意見を頂いている熱心な学生の姿を見て、「私ももっと頑張らなくては…」と反省させられました。このような体験も普通の学生生活では味わえない、私にとって大切な(少々苦い)思い出となりました。

今回このような貴重な経験をさせて頂きましたこと、さらにはお世話になりました多くの皆様方に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

---

## < J-ABA2012 大会参加体験記 >

# 高知での大会参加報告

馬場 ちはる (関西学院大学大学院文学研究科総合心理科学専攻)

9月1日、2日に高知城ホールで開催された日本行動分析学会第30回年次大会に参加させていただきました。第30回年次大会では、ポスター発表の機会をいただき、特別講演やシンポジウム、公開講座を拝聴し、懇親会にも参加しました。本大会の参加を通して感じたことや考えたこと等をご報告いたします。

行動分析学会には何度か参加しており、本大会では二度目のポスター発表を体験しました。私にとってポスター発表は行動分析学会でまず楽しみとするようになり、‘是非、加わってみよう’と少し気合いを入れて臨むようになったプログラムです。今大会における私の発表内容はロヴェアースのディスクリート試行トレーニングを用いた自閉症幼児の療育場面において、一次性強化子および習得課題の散在手続きによって課題の難易度を調整することで対象幼児の苦手課題への学習参加行動が増大したというものでした。多くの方が聞きに来て下さり、研究についての質問や新たな研究と実践の方向性のご示唆をいただき、また療育における類似の経験談を共有して下さる方もいっしょり、発表して良かったと思えました。また自身の発表のみ

でなく、他の発表者の方々の研究も聞きに行きました。発表の題目と内容がバラエティーに富む中で、特に幼児児童生徒への行動分析に基づく支援に関する研究発表を中心に巡りました。十分に触れたことのない内容も多く、説明に聞き入ったり、思いついた簡単な質問をしてみたりと、とにかく関わってみました。どの発表者も親切丁寧に答えて下さり、とても良い勉強になり、これをきっかけにもっと調べてみようと思う内容もありました。個別もしくは少人数で実際に対面して率直な感想やコメントを交わすことができるのはポスター発表の最大の魅力だと思います。

どのプログラムもたいへん興味深いく、私が現在関わっている場面とも照らし合わせて多くを考える機会を与えていただいたプログラムに自主企画シンポジウムⅡ「臨床場面における一事例の実験デザイン」がありました。シンポジウムにおける一つのテーマは、臨床場面における行動データの収集の困難さにどのように対応していくかというものでした。相談室等における臨床場面の中には、行動に関連した問題が相談室外で多く生起している等の理由から評価の

指標となる従属変数の選定やそのモニタリング方法の決定と実施が困難な場合がある点などが挙げられていました。それに対してどの先生もケースに合った指標を考えておられ、またデータ収集の方法も工夫されておられ、たいへん興味深く勉強になりました。私は現在、発達障害を有する幼児児童の療育に加え、通常学級に在籍する児童の授業参加行動のアセスメントおよび支援にも関わっているのですが、直接観察が可能で従属変数やその観察・記録方法においても参考にできる先行研究例が多い中でも、対象児童に合った標的行動の選定や測定者と教室状況に適した無理のないモニタリング方法の決定と実施を難しいと感じることが多くあります。教室での出来事に対応していると途中で観察記録がとぶことなどもあります。会場の先生方のコメントからも、問題の仕組みについての仮説が立てられ、すぐにケースや状況に即した従属変数やそのモニタリング方法が決定できること

はオン・ゴーイングな支援の実施とも関連して大事なのだと感じました。

高知城のすぐ隣に位置した会場および少し郊外へ赴くと美しくゆったりとした光景の広がる高知の地で開催された今学会は、多くを学び考える機会となりました。また、前の大会や関連学会でお目にかかり、お話をさせていただいた方々にも久しぶりにお会いでき、嬉しい場となりました。そして今回が初参加となった懇親会では年会費のキャッシュバック抽選にまで当たり、学会や参加者の親しみやすく温かい雰囲気と合わせて嬉しい強化を受け、また次回大会にも是非参加したいと強く実感しました。

拙い文章となりましたが、目を通して下さりありがとうございました。そして最後になりましたが、今大会でお世話になりました方々をはじめ、貴重な体験を与えて下さった皆様に深くお礼を申し上げます。

---

## 日本行動分析学会第 31 回年次大会のご挨拶

### 第 31 回年次大会準備委員長 平澤 紀子 (岐阜大学)

このたび、日本行動分析学会第 31 回年次大会を岐阜にて、2013 年 7 月 27 日 (土)、28 日 (日) に開催させていただくことになりました。

何かと至らないことが多いと存じますが、年次大会支援委員会のご支援をいただきながら、精一杯準備をさせていただきます。よろしくお願いたします。

なお、本年次大会は、前日の 7 月 26 日 (金) に名古屋付近で予定されている日本行動分析学会 30 年記念シンポジウムに連続して行われます。名古屋から岐阜は快速で 20 分ほどです。会

場を予定している岐阜大学は、JR 岐阜駅からタクシーで 25 分ほどです。

ただ、7 月 27 日 (土) は長良川の花火大会が開催されるため、混雑が予想されます。なにかとご不便をおかけいたしますが、ホテルは確保してございますので、1 号通信でご案内させていただきます。

この時期、長良川の鶉飼がございます。少し足を伸ばして頂くと飛騨高山もございます。多くの皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

<連載：いま、こんな研究しています（16）>

## 慢性疾患患者の健康行動に対する応用行動分析学の 適用と課題

飛田 伊都子（滋慶医療科学大学院大学）

「行動分析学」という行動心理学の一分野領域を知りましたのは、私が国立大学の助手（看護学）を経て大学院博士課程在学中に日本行動分析学会に参加させて頂いたのがきっかけでした。当初、異分野のため馴染みのない用語を多く耳にして難解な印象を受けましたが、内容を理解していくと医療の臨床現場において日常的に起きていることが三項強化随伴性という原理で理論的に説明できること、また弁別刺激や強化刺激を操作することによって標的行動の変容が可能であることを知ったときは深く感銘を受けました。ここでは、医療の臨床現場において患者を対象にした応用行動分析学的介入の現況を概説するとともに、私が現在行っている研究の一部を紹介し、将来的展望について述べます。

これまでの我が国における医療現場の患者を対象にした行動分析学的介入を実践した研究は、手術前の患者を対象にして最大吸気練習プログラムを指導する際に行動分析学的に介入し、その効果を検証するものでした。その介入は3週間以内の短期間で実施されたものであり（鎌倉・坂上、1996）、この論文以外は見当たりませんでした。しかし、多数の介入研究が報告されている糖尿病患者を対象にした食事療法の自己管理に関する介入研究を行動分析学的視点で分析すると、セルフモニタリングや言語的賞賛が強化子として採用されており、その有効性が論証されていました（稲葉・鈴木・飛田、2008）。

私は、自身の研究において慢性血液透析患者の運動能力の低下を予防するための運動プログ

ラムを開発し、その運動効果を評価する研究を計画中でした。欧米において運動能力を維持増進させる運動プログラムはすでに開発されており、その運動効果は報告されていましたが、運動するという行動すなわち「運動行動」を継続させることには限界を述べていました（Cheema, Abas, Smith, O'Sullivan, Chan, Patwardhan, Kelly, Gillin, Pang, Lloyd, & Singh, 2007）。そこで、運動行動を標的行動として、それを長期的に継続させることを目指す行動分析学的介入を実施評価することを試みたのです。

慢性疾患患者は、運動行動のような健康行動を生活の中に取り入れることは身体にとって良いことであり、その行動を長期間持続させることは重要であると認識しています。しかし、それでも継続することは容易なことではありません。看護師として医療施設で在職していたときから、このような患者に対してどのような指導が有効なのか、また患者が無理なく継続できる方法とはどのようなものだろうかと長年模索していました。慢性疾患は治療を施しても完治しない場合があり、「その病と共に生きる」もしくは「治療と共に生きる」ことを余儀なくされることも少なくありません。慢性血液透析患者も例外ではなく、健康行動を生涯継続するように指導されます。飛田・鈴木・伊藤（2008）は、慢性血液透析患者13名を対象に、運動能力の低下を予防するため運動プログラムを長期的に継続するための行動分析学的介入を3ヶ月間実施し、その運動実施率を算出することにより介入

の有効性を評価しました。行動分析的介入の強化子としては、グラフィックフィードバック、言語的賞賛、シールの貼付を採用しました。また、運動プログラムは透析治療日に病院内で実施できる簡易式エクソサイズを採用しました（飛田・鈴木・島本・安江・南海・小林・中村・長南, 2010）。対象となった患者は全員が週に3回の透析治療を要する患者であり、運動する日は治療日同様週に3セッション（日）でした。その結果、13名中12名において90%以上の運動実施率を示しました。また、同様の研究において、9セッション（3週間）連続して運動行動を生起させない対象者を「運動行動中断者」と定義し、それ以外を「運動継続者」と定義したうえで、行動分析的介入を提供しない対照群との運動継続者数の割合を比較しました。その結果、行動分析的介入をした群の運動継続者は100%であるのに対して、介入をしない対照群における運動継続者は62.5%であり統計学的有意差が明らかとなりました（Tobita, Suzuki, Kobayashi, Shimizu, & Umeshita, 2009）。したがって、慢性血液透析患者における運動行動の行動分析的介入の有効性が明らかにされています。

さらに、同運動プログラムを18ヶ月以上継続した慢性血液透析患者11名（男性6名、女性5名）を対象にして、運動に関する心理社会的要因について検討しました。具体的には、①「運動効果に対する信念」②「運動に関する意欲」③「運動の行動感覚尺度」④「運動自信感」の4つの下位項目が含まれる「運動行動をめぐる心理社会的要因に関する尺度」（橋本・岩崎・宗像・江澤, 1996）を使用し、その推移を調べました（図1参照）。その結果、全対象者の各下位項目別の平均スコアがベースラインに比べて12ヶ月目までは増加しますが、18ヶ月目には4つの下位項目全てが12ヶ月目に比べて低下しました（小林・田中・木村・飛田, 2012）。これは、運動における心理社会的要因が低下しても、患者が運動行動を継続させることが可能であることを示唆しており、個人の行動を長期にわたり

観察すると、運動に関する行動面と認知面にはある時期から乖離が生じると考えられます。個人の運動行動そのものが、生活の中で形成され定着された状態に到達すれば、運動に対する意欲や信念が常に高い状態でなくても、運動できる環境が整えられていれば運動行動を継続させることが可能であることを示唆しています。看護師が日常的に患者に提供する支援としての役割を考慮すると、個人の行動が新規に形成されていく過程においては、その行動が定着するように認知面に働きかける介入が必要です。しかし、行動が一旦定着する、つまり習慣化すれば認知面における直接的介入の必要性は弱まり、むしろ運動できる環境を提供できれば行動は継続できることが示唆されました。このような結果は、臨床場面に還元できるエビデンスとして活用されることを期待しています。今後は、医療分野と行動分析学の分野をさらに学際的に融合させ連携することにより、臨床現場における様々な状況の患者に対して有効な行動分析的介入を引き続き検討し、新しい分析手法による確実な成果を関係者とともにあげていきたいと考えております。

#### 【引用文献】

- Cheema, B., Abas, H., Smith, B., O'Sullivan, A., Chan, M., Patwardhan, A., Kelly, J., Gillin, A., Pang, G., Lloyd, B., & Singh, M. F. (2007). Randomized controlled trial of intradialytic resistance training to target muscle wasting in ESRD: the progressive exercise for anabolism in kidney disease (PEAK) study. *American Journal of Kidney Diseases*, 50, 574-584.
- 橋本佐由理・岩崎義正・宗像恒次・江澤郁子（1996）. 運動行動をめぐる心理社会的要因に関する尺度の検討, 日本保健医療行動科学会年報, 11, 215-232.
- 稲葉千紘・鈴木純恵・飛田伊都子（2008）. 糖尿病患者の食事療法の自己管理に関する介入研究の分析: 行動分析の視点より 日本行動分析学会第26回年次大会発表論文集, 50.

鎌倉やよい・坂上貴之 (1996). 手術前呼吸練習プログラムの開発とその効果の検討 行動分析学研究, 9, 2-13.

小林光子・田中優子・木村みゆき・飛田伊都子 (2012). 慢性透析患者が運動を継続するときの実際の行動と心理社会的要因の関連 第42回日本看護学会論文集成人看護II, 46-48.

飛田伊都子・鈴木純恵・伊藤正人 (2008). 運動行動の維持を導くプログラムの有効性:慢性血液透析患者における臨床実験介入的検討 日本行動分析学会第26回年次大会発表論文

集, 49.

Tobita, I., Suzuki, S., Kobayashi, T., Shimizu, Y., & Umeshita, K. (2009). A programme to encourage participation of haemodialysis patients in an exercise regimen. *Journal of Renal Care*, 35, 48-53.

飛田伊都子・鈴木純恵・島本英樹・安江郁子・南海津由子・小林光子・中村淑子・長南由香 (2010). 透析中の床上運動プログラムの効果, 日本腎不全看護学雑誌, 12, 43-39.

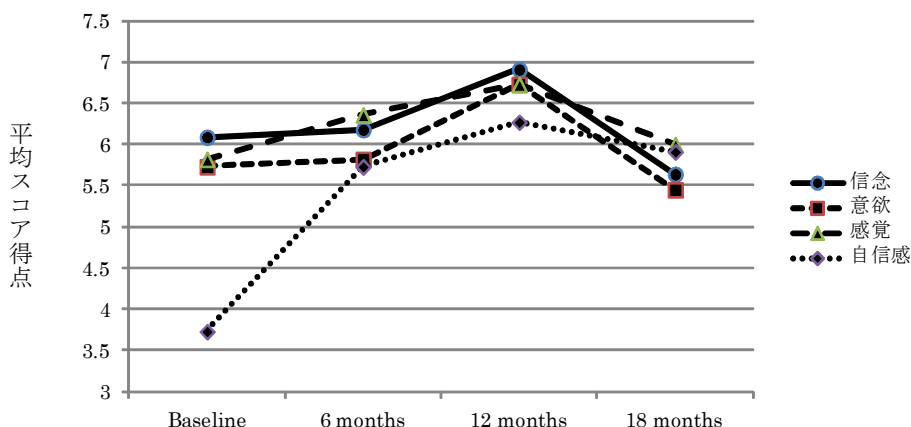


図1 心理社会的要因の推移 (平均スコア)

注) 図中の「信念」は「運動効果に対する信念」、「意欲」は「運動に関する意欲」、「感覚」は「運動の行動感覚尺度」、「自信感」は「運動自信感」の略である。

<連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職（10）>

## 日本とアメリカの融合的システム構築を目指して

越智（糸井） まどか（Spectrum Behavioral Solutions）

私は現在、アメリカはオハイオ州の地方都市 マンスフィールドで、自閉症の子どもたちのための療育機関で Clinical Director として働いてい

ます。アメリカ全体で見た場合、自閉症児への介入の成功例を始め、様々な分野で行動分析が貢献する度合いが高まるにつれて、行動分析家



や BCBA という肩書きが大きな意味を持つようになってきました。ですが、地方の場合、問題行動への対処法全般や行動分析の手法に対する理解度に 10 年から 15 年ほどの開きがあるように感じられます。マンスフィールドも例外ではなく、州都であるコロンバスから 1 時間強離れた私の働くセンターは、地域でほぼ唯一の ABA に基づいた療育機関として開所から 1 年でクライアント数が 2.5 倍に増え、さらに wait list の名前も増え続けている状況です。

私が行動分析に出会ったのは、日本の大学を卒業後、留学先のおハイオ州立大学でのことです。もともと日本での大学時代、ADHD や学習障害、軽度の知的障害を持つ中高生のための余暇活動プログラムに関わっていた私は、特別支援教育に進みたいと強く思うようになっていました。そして卒論のためにプログラムの参加者の通う学校を見学させていただき、必ずしも専門的教育を受けているわけではない現場の先生方が公立の学校で試行錯誤しながら教育に従事されている姿に感銘を受けると共に、それぞれの先生方による個人差の大きさを目の当たりにして、制度として何かが違うと思いはじめました。大学卒業後、特殊教育の課程に進もうと調べていて、より効率良く個人差に惑わされずに教えられるシステムはないかと海外に目を向けたのが、おハイオ州立大学の修士課程に出会ったきっかけです。当時は行動分析も何も知らず、いくつか出願した中で書類が来るのが一番早かったという何とも安直な理由で選んだ大学院でしたが、先の ABAI のプレジデントであられた William Heward 先生が日本好きを前面に押し出して私の担当教授になってくださり、そこから全てが始まりました。私にとって幸運だったのは、Heward 先生の研究テーマのひとつが group instruction、つまり一斉指導の中での行動プリンスプルの応用だったことです。日本で大人数での授業についていけない子どもたちに関わっていた私は、先生の提唱する ASR (Active Student Response) に大興奮しました。週末に教えていた

日本語補習校で実際に日本語の一斉授業の中で ASR のテクニックを磨くこともでき、片田舎のおハイオくんだりまで来て良かったと、アメフトファンの喧騒を掻き分けながら自らの幸運を一人称えたものでした。修士修了後は、コロンバスの Children's Hospital の自閉症クリニックで 1 年間働いた後、博士課程に戻って 2008 年に修了後、カリフォルニアでの 2 年間の武者修行を経て今に至ります。

2007 年頃から、行動分析家の間で、行動分析の手法を伝える方法論について大きな論調の変化があったように思います。それまでの、いかに一般の人に高度な行動分析の手法と考え方を余すことなく伝えるかの議論から、一般の人に伝えるべき知識と専門家に伝えるべき知識は違うのではないか、という方向への転換です。私の働くセンターも例外ではありません。自閉症児の療育でおそらく一番大変なのは、膨大なデータの管理と、データを取る側であるスタッフの統合性をいかにして一定の基準に保つか、ということではないでしょうか。規模が大きくなればなるほど、スタッフの質を一定に保つのは難しくなっていきます。私の働くセンターでは、ABA Webtech というデータ収集のアプリを導入し、タブレット上でタッチスクリーンでのデータ収集を可能にしています。これによって初期段階のスタッフトレーニングでは ABA プリンシプルに集中することができ、そのほかの既習・新規ターゲットの割合だとか、どの段階で Errorless teaching にするかといった指導面での間違いを減らすことができるようになりました。結果として、スタッフの離職率が減り、より上の段階に進んでからより高度なプリンスプルを学べるとあって、やる気も高まっています。また、自閉症児への介入と一口に言っても、子どものスキルによって介入すべき対象も、方法も変わってきます。私の働くセンターでは、3 つのプログラムを設けています。生活面の支援と職業支援につながる指導をするプログラム、学習面とソーシャルスキルを中心に、公立学校に

戻すための指導をするプログラム、そしてその中間のプログラムです。それぞれのプログラムにおいて、1対1から現行では1対6までスタッフとクライアントの割合に幅を持たせ、より大きなグループに移行させることを目標に日々の指導を行っています。私が日本人で日本式の教育を受け、さらに日本で教員免許を取得した、ということが、特に学習指導の場面においては特色のあるプログラムの構築に役立っています。今年もクライアントは朝顔の種を植えて観察日記を書き、スタッフは黒板かホワイトボードに

板書をしまくりながら視覚教材を工夫しています。おそらく、アメリカで唯一日本のチョークを使用している自閉症センターではないでしょうか。

こんな形で、今日も私は30人強のクライアントと、アメリカ人には珍しいほどの勤勉なスタッフと共ににぎやかに過ごしています。今後も日本とアメリカの良いところを取り入れつつ、より良いシステムのあり方を模索していきたいと思います。

---

## 混沌、若さ、ルールと行動随伴性

### ヨーロッパ行動分析学会リスボン大会に参加して

吉野 俊彦（神戸親和女子大学）

9月6日午後4時過ぎ、私と智富美とはラフィアブレッドハットをかぶった日本人風の男をそこに発見した。午後5時に始まるオープニングセレモニーに間に合うように歩いてはいたものの、肝心の *Universidade Lusíada do Porto* は騎馬警官に尋ねても知らないと言われてしまうほどわかりにくかったのだが、その男、関西学院大学の中島定彦先生はいつもの満面の笑みで、ちょっと見ただけではそれとはわからない入り口の前の歩道に立って、「もう何人か案内したんですよ、わかりにくいですね。中に入らずと奥が受付です」と案内してくれたのである。私にとっては、2003年にPolandのGdanskで開かれた第2回大会以来の参加となる、ヨーロッパ行動分析学会（以下 *eaba*）第6回Lisbon大会はそうにして幕を開いた。

さて、この報告書でのメッセージは3点に要約できる。大会はところどころで混沌としつつ、ヨーロッパにおける行動分析学は若い学問であ

り確実に成長していること。さらに、*eaba*に限らずだが、学会やその町を構成している人たちが形作っている行動随伴性に晒されることの重要性である。

#### 1. 混沌

混沌という言葉は学会には適当でないが、たとえば以下の2つの例を挙げれば、おおよその想像がつくだろう。Erik Arntzen 教授 (*Høgskolen i Akershus, Norway*) によるオープニングの大会会長講演は17時開始予定だったが、その時間が刻一刻と迫っていても、受付は混沌としたまま。予約参加者の名前を尋ねて東になった名札と参加証明書を一枚一枚めくっては時間を無駄にしている。列を成しているのかどうか、あたりにたむろする人たちが文句を言うでなく、またそのときすでに壇上にいた Arntzen 教授も苛立つ様子もない。オープニングセレモニーはこのあと Paolo Moderato 教授 (*Libera Università di*

Lingue e Comunicazione IULM) による招待講演、Portugal の社会保険庁長官に相当する Pedro Mota Soares なる大臣の話を挟んで、Portugal の演歌とでも呼ぶべき Fado の実演とワインテイasting (文字通りのテイastingのみ) と続いた。

翌日からは Lisbon 市内からテージョ川沿いに 6 km ほど西の Belém 地区 (ジェロニモス修道院、発見のモニュメントといった観光地でもある) にある文化センターに場所を移した。初日の 18 時から 2 時間のポスターセッションが混沌の 2 つめの例である。予告に従って準備したポスターのサイズは 120 cm × 120 cm。置かれていたパネルのサイズは 90 cm × 180 (?) cm。30 cm のはみ出しをものともせず、開始 1 時間半くらい前によく準備されたパネルが埋まっていた。Fig. 1 は中島先生のポスター発表の様子だが、右上のポスターがお辞儀をしている様子に注目!! ちなみに、そのあたりに会場係は見当たらず、貼付に使うイギリスで Blu-tack と呼ばれるもの (日本でひつつき虫?) がそれぞれのパネルに必要量ひつついていただけであった。

考えてみると、混沌と言うよりもむしろ、こうした状況でも整然と事が進んでいくと言った方がよいのかもしれないが。

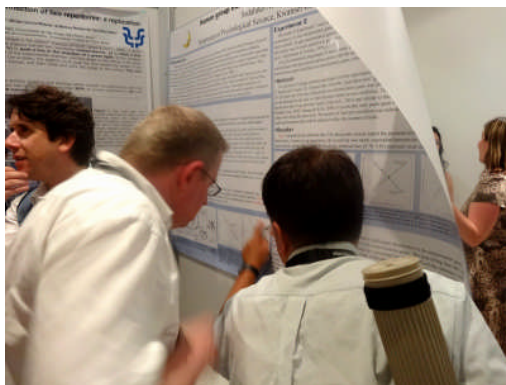


Fig. 1. 予告されていたよりも小さなパネルであったために一部がお辞儀をしているポスター。ちなみに、右側の日本人風の男は、ラディカルな主張の持ち主である François Tonneau 教授 (Universidade do Minho, Portugal) の攻撃を受ける中島先生 (関西学院大学)

## 2. 若さ

さて、ヨーロッパで行動分析を学ぼうとする、Ireland の 6 大学、Wales の 3 大学を除けば、England、Poland、Norway、Sweden、Finland、Greece、Croatia、France にそれぞれ 1 大学ずつ、France には協会がひとつ、Spain では ABA España という組織が 2 つ、Italy に NPO 法人、Romania と Russia にもそれらしき組織がひとつずつと、お世辞にも豊かとは言えない。Ireland や Wales が比較的早くから行動分析学を扱っていた以外は、大陸合理論だけが理由ではなからうが、他の組織は、たとえば Spain ABA は 2004 年、Greek は昨年のように、ここ 10 年くらいの間に設立されている。また eaba も 2001 年に Phil Reed 教授 (Swansea University, Wales、当時 University College London) を初代会長として、萌芽的な組織が形成され、2008 年に互選によって現在のような学会運営の組織ができるなど、まだよちよち歩きの状態と言えなくもない。

このように若いヨーロッパの行動分析学だが、学問的な水準もよちよち歩きの状態であるわけではない。上述の組織以外でも多数の研究者が行動分析学の研究を行っていることは周知の通りである。また、上述の 24 の組織のうち、Greek を除く 23 団体については、BACB から認定されており、BCaBA や BCBA の資格取得が可能である。

大会の様子からこうした若さを象徴する現象として 2 つの例を挙げたい。ひとつは、2003 年の Gdansk 大会と比較して、遙かに多くの若者が参加していたこと。それに伴ってかポスターの数も増えたというか、2003 年にはポスター発表者についてはプログラムに名前が掲載されていなかった。ついでに言葉を滑らせれば、Robert C Mellon 教授 (Panteion University, Athens) が引き連れていた数名の美女たちは 80 年代後半の東京でも多く見られたソバージュにボティコンのワンピースを身に纏い目も眩むばかりだった。若い人が多いのは日本でもそうだが、おそらく

異なっているのは、BCBA のポイントの獲得のために参加している、ちょうど日本の臨床心理士の研修会のような雰囲気を感じられたことだろうか。基礎系、理論系のセッションでは Jackson Marr 教授 (Georgia Institute of Technology, USA)、Iver H Iversen 教授 (University of North Florida, USA)、Ricardo Pellón 教授 (Universidad Nacional de Educación a Distancia, Spain) らを筆頭に盛んに質問や意見が交わされていたが、臨床系のそれでは出ても一つ二つといったところだった。

もうひとつはセッションのテーマが実験、実践だけでなく、理論的な内容のものが少なからずあったことである。これを若いと呼ぶことについては異論もあるが、その内容が行動分析学の理論と哲学といったものも含めて、学会のセッションで議論されるというよりも、大学の教室で聴くことのできるような内容が少なからずあった。要は、参加者に対する多分に教育的な意味合いを大会が持っているのではということなのだろう。

### 3. ガイドブックのルール、実際に働いている行動随伴性

海外に出かけると大会会場だけでなく、町中でも如何に私たちが行動随伴性によって行動を制御され、その結果として様々な認識 (ルールと呼ぼう) が形成されているかを痛感する。というよりも、これまでに形成されてきた自分のレパトリーに含まれる行動のいくつかが見事に消去されて、変動性が高まると言った方がより適切かもしれない。いきおい手にしたガイドブックを広げたくなるのだが、そこに書かれているルールを知らないままに行動してみるのも、つまり実際に働いている随伴性に晒されるのも悪くない。

前項に挙げた混沌に加えてもよい例でもあるが、大会ではこんなこともあった。昼食休憩は 13 時から 14 時。会場の入口はその間何と閉鎖されていた。受付の係員が鍵を持って慌てる様

子もなく戻ってきたのは実に 14 時の 2~3 分前。参加者、おそらくとりわけ発表予定だった人たちは不安を感じていなかったのだろうか。私が出席した 14 時からのセッションでは、そうした遅れは織り込み済みとして (鉄道もそうだが、日本では、車内アナウンスでわずか 2~3 分の遅れについての深いお詫びを繰り返し聞かされ、様々なことを理解・協力させられていることか!!) 淡々とセッションが進められていったのも驚きだった。

海外の学会に参加することの意義は、自分の研究発表 (2~3 人から興味をもっていただいた)、各地の研究者たちとの繋がり (今回も収穫あり)、最新の研究動向の理解 (この点は *eaba* は少し物足りないかも) などなど、大会会場に転がっている行動随伴性に晒されることには違いないが、私にはむしろ、訪れた町でそれぞれに異なった随伴性に晒されること、つまりは自分自身の行動が如何に随伴性によって制御されているかを実感することにあるのではと感じることがある。ヨーロッパはその点で、(正直に白状すればまだ一度も参加したことのない ABAI の) United States よりもずっと面白いと感じる。英語が通じないということもそれを助長する。文化を 3 番目の変異と選択の水準であると喝破した Skinner の何と偉大なことよ。

### 4. おわりに

肝心の大会の概要をまとめておきたい。プログラムに掲載されているものをまとめるだけだが、9 月 9 日までの 4 日間に特別講演・招待講演・基調講演など 8 件、シンポジウム 12 件、口頭発表セッション 18 件 (各 3~4 名の発表)、ポスター発表 66 件だった。国別の参加者数について最終日に問い合わせたところ、数日中に連絡をくれるとのことだったが、現在集計中との連絡が一度来てからは、どうやらシエスタに入ったままらしい。

興味を覚えたアカデミックな内容に言及する前に紙数が尽きた。個人的なことだが、博論の

viva (UK の学位論文の口頭試問、ヴァイヴァと読む) の主査 (指導教員は主査にも副査にもなれない) をしてくれた Chris M Bradshaw 教授 (University of Nottingham, UK) の格調高い講演を聴いた後で、久々に議論できたことを挙げるに留める (Fig. 2)。

*eaba* の大会はこのところ 2 年に一度開かれている。第 3 回の Milan が 7 月下旬、第 5 回の Crete は 9 月下旬だったが、その他は 9 月上旬と日本の大学関係者には出席しやすい時期に開かれることが多い。*eaba* 以外にも、上述した、それぞれの国・地域で独自の大会 (多くの場合 1 日乃至 2 日の短い日程) が開かれている。まだ若いヨーロッパの行動分析に、また、多様な随伴性に触れることをぜひぜひお薦めしたい。尤も、現時点で *eaba* の次回大会は時期も場所も未定なのだそうです。



Fig. 2. 行動レベルと生理学的な実質とのブリッジについて招待講演した、物静かな、けれども認知的な構成概念には極めて批判的な紳士 Chris M Bradshaw 教授 (University of Nottingham, UK) と筆者 (左右どちらがいずれかは読者の想像にお任せする)

追記：今回の大会における合計参加者数は 252 名、予約参加者数は 209 名であった。国別には多い順に、Norway : 44 名、Brazil、UK : 27 名、USA : 22 名、Spain、Sweden : 13 名、Italy : 10 名、France、Portugal : 9 名、Germany、Japan、Poland : 5 名、Finland : 4 名、Greece、Ireland、Switzerland : 3 名、Netherlands : 2 名、Belgium、Canada、India、New Zealand、Romania : 1 名であった。

---

## 2013 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」応募要項

### 国際委員会

日本行動分析学会は、創立 20 周年を機に、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、ABAI への参加を助成する事業を開始し、さらに 2007 年度からは SQAB へ

の参加も助成対象に加えました。また今年度からは隔年で開催される国際会議への参加も助成対象に含めることとなりました。学生会員の奮っての応募を歓迎します。

1. 助成対象学会：

1) 2013年5月に米国ミネアポリスで開催されるABAI第39回年次大会またはSQAB

2) 2013年10月にメキシコで開催される第7回国際会議

但し、2012年9月14日現在、国際会議については申込締切や受理の期日が明示されていないため、それらの期日が応募締切の2013年3月31日を過ぎる場合には今回は申請できないこととする。

2. 発表の種別：口頭発表、ポスター発表、シンポジウムやパネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。ただし、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。

3. 応募資格：

1) 2012年10月1日に本学会の学生会員として登録されている者で、対象学会参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABAが募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。

2) 申請時に日本国内に居住していること。

3) 過去にこの事業による助成を受けた者も応募できるが、選考にあたっては、過去にこの事業による助成を受けていない者を優先する。

<提出書類>

1) 規定の応募用紙に必要な事項を書き込んだものの。応募用紙は、ニューズレター、学会ホー

ムページあるいは学会事務局からも入手できる。

2) 対象学会発表申込時に提出した「発表申込書」を印刷したもの。

3) ABAIが発行する「発表受理書」を印刷したもの。

<助成額>

応募者の中から2名に対し、1名につき75,000円を支給する。ただし、受給後、対象学会に参加を取りやめた者は返金しなければならない。

<応募締切>

2013年3月31日消印有効。

<選考方法>

過去にこの事業による助成を受けていない者を優先し、原則として、2013年4月20日までに、事務局において公開抽選を行い、常任理事会において助成者を決定し、該当者に通知する。その他、選考に必要な事項は常任理事会で決定する。

<応募先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

URL：<http://www.j-aba.jp/>

E-mail：[j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

日本行動分析学会第31回年次大会

会 期：2013年7月27日(土)・28日(日)

開 催 校：岐阜大学

準備委員長：平澤紀子(岐阜大学教授)

前日(7月26日)は名古屋市で記念セレモニーとシンポジウム開催



前号 (No.66)の訂正

1ページ右段最終行 (正) 本学会初代会長 ← (誤) 本学会初代理事長

## 編集後記

このたび初めて J-ABA ニューズの編集を担当させて頂くことになりました。前号を担当された編集委員の先生も仰っておられましたように、実際に編集に関わってみて、これまで編集に携わってこられた先輩方のご苦労を実感しております。「自分の特色を出す」余裕などまったくなく、引き継ぎ事項をただなぞるだけで精一杯でした……。しかし、記事収集や編集作業を通して、行動分析学会で今どのようなことが行われているのかがわかるようになり、これま

で交流のなかった行動分析家の先生方とお知り合いになることができたのは、私にとって貴重な経験でした。これから3年間、編集委員として活動させて頂きませんが、自分だけではなく、このニューズレターを読んで下さる会員の皆様にも、同じような経験をして頂けるように頑張りたいと思っています。どうぞ、よろしく願います。

(DS)

## J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582 大阪府柏原市旭が丘 4-698-1  
大阪教育大学 大河内研究室 気付  
日本行動分析学会ニューズレター編集部  
大河内浩人  
E-mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp